

3 産業発展史から見た広島県産業の特徴



広実 孝
HIROZANE Takashi

公益社団法人中国地方総合研究センター
経済・社会システムユニット/サブリーダー

広島の産業は鉄鋼業や機械工業を中心として発展し、多くの関連企業が生まれ育ってきた。開拓精神が旺盛といわれる県民性もあり、現在に至るまで多種多様な分野において全国的にも有名な地元企業も少なくない。広島産業発展に貢献した地元企業に迫る。

多様性に富む広島県産業

広島県は機械工業の盛んな広島市を中心に、東部には繊維産業の伝統を受け継ぎながらも、鉄鋼業や機械工業などの工業都市として発展した県内第二の都市福山市、商都や港町として栄えた尾道市、高級家具の町として知られる府中市がある。中部には大規模な軍需工場の進出をきっかけに工業化が進んだ呉市、広島大学が立地し近年様々な産業や研究機関の集積地となりつつある東広島市などがある。西部には伝統的な和紙の産地であり、山口県岩国市にまたがる国内初の石油化学コンビナートを有する大竹市があり、さらには世界遺産の宮島を擁し、木製品や食品工業の集積する廿日市市といったバラエティ豊かな地域から成り立っている。加えて、北部には電子部品や自動車部品工場、自然豊かな観光資源のある三次市、庄原市などユニークな都市が存在しており、瀬戸内海には造船業と柑橘類で知られる島々がある(図1)。

このように、多様な産業の集積が見られるものの、かつての広島県は決して現在のような工業地帯でも豊かな土地でもなかった。特に、経済の中心地である広島市は、広島城が築城された1600年頃は五箇村と呼ばれ、現在の陸地の大部分はまだ形成されておらず、太田川の河口に広がる三角州や大小の島々から成り立つ寒村であった。時代と共に、埋立てな

どによって陸地を広げていったが、それでも平野部は希少で農業に適した土地はあまりなかった。広島県民はフロンティア精神やチャレンジ精神が旺盛であるといわれることがあるが、苦労を重ねて土地を開拓していったという歴史もその背景にあるのかもしれない。また、歴史的にブラジルやハワイなどへの移民が多いが、これも開拓できる土地が少なかったため、海外にフロンティアを求めて移住していったことが大きな理由であったともいわれている。

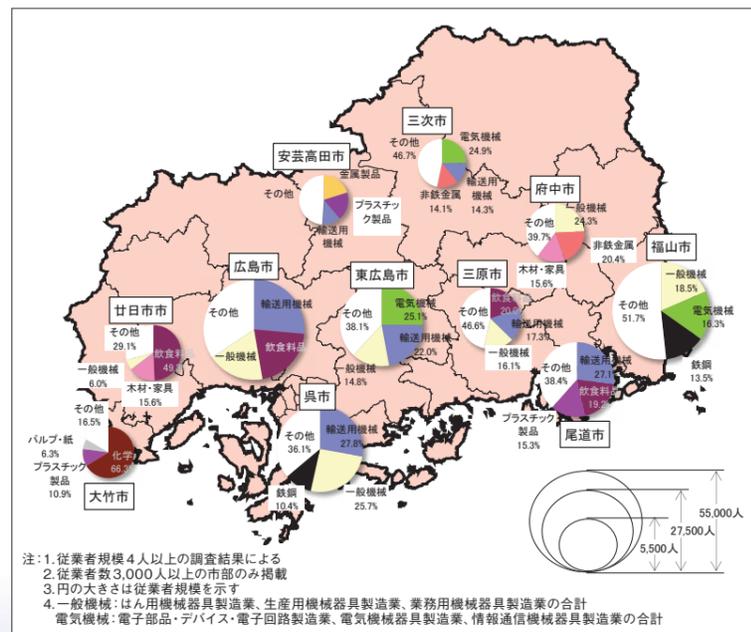


図1 従業者数から見た主要市部における製造業の業種別構成比

注: 1. 従業者規模4人以上の調査結果による
2. 従業者数3,000人以上の市部のみ掲載
3. 円の大きさは従業者規模を示す
4. 一般機械: はん用機械器具製造業、生産用機械器具製造業、業務用機械器具製造業の合計
電気機械: 電子部品・デバイス・電子回路製造業、電気機械器具製造業、情報通信機械器具製造業の合計



図2 近代初期の鉄生産高の推移

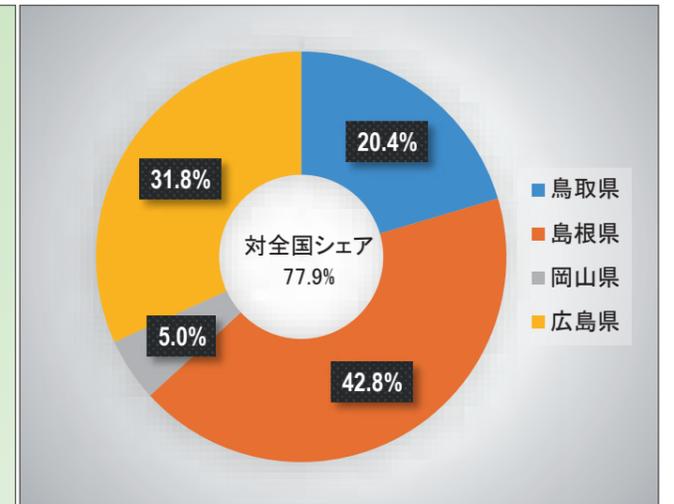


図3 中国地方の鉄生産高の県別シェア(明治23年)

地場産業の発展に寄与した製鉄業

広島県は全体として平野部が少ない土地であるためか、耕作地が限られていた一方、山間部を中心に鉱産物に恵まれ、中国山地沿いに産出する砂鉄を原料とした製鉄業が発達した。たたら製鉄と呼ばれるこの製鉄技術は古代から綿々と受け継がれ、明治時代の初めから半ばにかけて中国地方で生産された鉄が国内の大部分を占めるほどであった(図2)。

中国地方で特にたたら製鉄が盛んであったのは島根県、鳥取県、広島県の3県であり、このうち広島県は明治時代半ば頃には島根県に次ぐ生産量を誇った(図3)。田部家や櫻井家といった大規模な鉄山師(製鉄業者)が存在した島根県に対し、山県郡の佐々木家(加計家)を除けば小規模事業者が多かった広島県では、小規模鉄山を統括する官営鉦山として運営されており、山間部で製造された鉄は県内を流れる河川を利用して沿岸部まで運搬され、県内産業の原材料として活用されてきた。

県内の地場産業として発展してきたものに鋳物、針、やすり、錨といった鉄に関連したものが多く、10種類の鉄製品を称して安芸十利とも呼ばれている。この背景には山間部の製鉄業の存在と水運に適し

た河川という地の利があったことはいまでもない。このうち、鋳物業から発展してきた企業の一つがホーロー浴槽で知られる広島市の大和重工である。針については広島市が国内の9割以上のシェアを誇っており、大正7年創業の萬国製針の手縫針は国内シェアNo.1である。やすりに関しては呉市の仁方がシェア9割以上となる国内有数の産地となっている。また、福山市の鞆地区は現在も船具や錨、各種鉄鋼製品の生産拠点として知られている。

たたら製鉄の終焉と近代的製鉄業への転換

残念ながら、たたら製鉄は高炉製鉄の本格化によって衰退の一途をたどる。たたら製鉄を受け継ぐ最後の企業ともいえるのが野島国次郎氏による帝国製鉄(昭和2

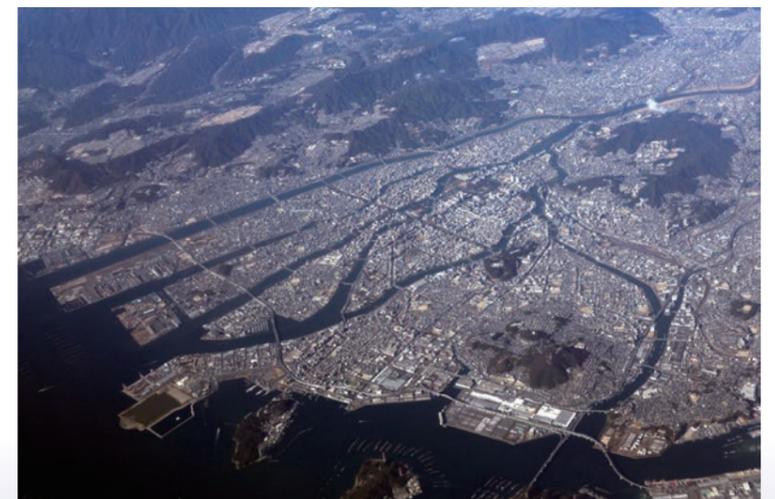


写真1 多くの川とともに発展してきた広島市



写真2 陸軍糧秣支廠跡 (現:広島市郷土資料館)



写真3 陸軍被服支廠跡

年創業)だが、同社が昭和41年に倒産したことで広島県におけるたたら製鉄の歴史は終焉を迎えた。因らずも、この前年に日本鋼管(現:JFEスチール)が国内最大級の高炉を備えた銑鋼一貫製鉄所を建設すべく福山市に進出したことは、県内の鉄鋼業が伝統的製鉄業から近代的製鉄業へ移行したことを象徴するものとなった。

軍需による県内産業の発展

広島市には陸軍の第5師団が置かれ、呉市には海軍拠点の鎮守府があったため、軍の関係者も多く軍需の影響力は大きかった。また、官営の軍需工場として、県内最大級の呉海軍工廠をはじめ、広島市に陸軍糧秣支廠(保管・補給・製造施設)や被服支廠などが設置され、民間でも様々な軍需工場が出現した。

現在は自動車メーカーとして知られるマツダは、かつて呉海軍工廠をはじめとする軍需の協力工場として軍需品の製造を行っていた。日本製鋼所広島、三菱重工業広島、三菱電機福山、広島メタル&マシナリー(旧:寿工業)、神田造船所、久保田鐵工所など、軍需目的で事業を開始し発展した企業や工場も数多く見受けられる。これら軍需工場のほとんどは兵器や軍需機器を扱っていることから大部分が機械関連であり、現在も広島市を中心に県内産業において加工組立型業種のウエイトが高い理由の一つとなっている。

三菱重工業の4工場

多くの機械工場の中でも最盛期に4工場が稼動していた三菱重工業は特筆すべき存在だといえる。同社の工場は第二次世界大戦末期の昭和19年になって、広島市沿岸の埋立地であった観音地区と、これに隣接した

江波地区の2カ所に進出した。このうち観音地区の総合造機工場は、軍需品の増産で生産余力が乏しくなっていたという三菱重工業側の理由による工場新設であった。一方、江波地区に建設された造船工場は、海上輸送力の強化を狙う海軍の指示によるものであった。近隣2カ所に同時に新工場が立地したのは以上のような事情があったためだが、これにより広島市沿岸部には三菱重工業の一大機械・造船工場地帯が出現することになったのである。

このほか、三菱重工業の工場としては、三原市に蒸気機関車などの車両工場、広島市祇園町に工作機械工場の2工場が存在していた。このうち工作機械工場については、東洋製罐・東洋鋼板の関連会社東洋機械(昭和14年創業)であったものを、軍の要請により三菱重工業が吸収合併したという経緯がある。工作機械工場は平成15年に閉鎖されるが、現在も広島県内には三原市の工場を含め三菱重工業の3工場が稼動を続けている。

コルク工場から発展した自動車産業

広島県を代表する地元企業として、マツダを知らない人はいないであろう。自動車産業は多くの部品メーカーから成り立っており、裾野の広い産業といわれる。広島県においても、マツダに部品を供給する企業や工場は多数あり、県内産業への影響力は大きい。

マツダの源流は明治23年創業の清谷商会という、コルク製品を製造する個人企業である。清谷商会はコルク需要の減少から経営破綻し、これを救済すべく大正9年に設立されたのが東洋コルク工業で、現在のマツダの直接的な前身企業である。同社は県内有数の実業家である海塚新八氏を社長に、清谷角八氏、煙谷孝吉氏、



写真4 広島市の自動車工場

松田重次郎氏などが役員として参画したが、間もなく海塚新八氏が病気により退任し、後任を松田重次郎氏が務めることになる。同氏が社長に就任して以降、コルク事業の不振や工場火災などもあって同社は機械工業への転換を図り、昭和2年に東洋工業へ社名変更した。後に同社が自動車メーカーへと変貌する重要な転換点であったともいえる。

松田重次郎氏の活動と功績

自動車産業の発展に大きな功績がある松田重次郎氏は、広島県安芸郡仁保村(現:広島市南区)の出身で、青年期は大阪で事業を行っていた。機械作りに関心を持ち起業意欲が旺盛であった同氏は、明治時代半ばから何度か起業と失敗を繰り返したのち、大正元年に松田製作所を立ち上げる。ロシア向け砲弾輸出などで多大の利益を上げた同社は、大正5年に日本兵器製造へ社名変更し、生産力強化を目指して新工場の建設用地を郷里の安芸郡仁保村に求めた。

ところが、この計画に役員の大部分が反対したことから、松田重次郎氏は同社を辞めて帰郷することを選び、大正6年に仁保村で新たに松田製作所を創業した。ただ、同社の経営は必ずしも順調ではなかったため、設立から1年後に広島への進出を図っていた国内有数の軍需会社日本製鋼所の傘下に入り、大正9年には完全を買収され日本製鋼所広島工場となった。こうした経緯もあって、松田重次郎氏はしばらく企業経営からは退くが、東洋コルク工業への参画によって再び第一線へ復帰することになるのである。

なお、大阪の日本兵器製造は松田重次郎氏が去った後も事業を継続し、現在は工作機械メーカーのOKK株式会社となっている。松田重次郎氏にとっては、帰郷することなく日本兵器製造にとどまるという選択肢もあ

りえた。その場合、マツダや日本製鋼所が存在せず、県の産業構造が現状とは大きく変わっていた可能性もある。そういう意味では、松田重次郎氏の帰郷は県産業にとって大きな意義を持つものであったといえるだろう。

個人的な企業群

広島県には地場の個人経営から全国的な企業へと発展したものや、中核製品が全国有数のシェアを誇る企業など、ユニークなものがいくつもみられる。「かっぱえびせん」や「ポテトチップス」で知られる菓子業界最大手のカルビーは明治38年に広島市で創業し、羊羹の製造販売を行っていた松尾巡角堂の流れを汲んでいる。カルビーの直接の起源は、大正9年に松尾巡角堂から分家した松尾商店であり、戦後になって松尾糧食工業、さらにはカルビーへと社名変更して現在に至る。これ以外にも、フマキラー(広島市の大下回春堂が起源)、セーラー万年筆(呉市の阪田製作所が起源)などがある。

このほか、広島県内には、ダイカスト(金型鋳造法)の分野では世界のトップメーカーである府中市のリョービ、明治29年創業で精米機など食品加工の分野で定評のある東広島市のサタケ、明治31年創業で各種金庫をはじめ金融機関向け金庫室やセキュリティシステムの分野でシェアNo.1を誇る広島市の熊平製作所、国産デニムの有力メーカーである福山市のカイハラなど、歴史のある優良な「ものづくり」企業が多数存在している。

また、東広島市西条の酒造、熊野筆、府中家具、宮島細工といった県内各地に残る地場産業や伝統産業、さらには優れた技術を有しオンリーワン・ナンバーワン製品を製造する企業も数多い。昭和60年代以降に多数進出した電子部品工場などは、広島県産業の多様性と厚みを一層増すことに貢献したが、これらも含め県内産業の生成や企業進出の過程など、これまでたどってきた歴史的経緯には大変興味深いものがある。

<参考資料>

- 1) 中国電力(株)エネルギー総合研究所・(公社)中国地方総合研究センター「広島県を中心とした産業発展の歴史」(平成22年)
- 2) 東洋工業(株)「東洋工業五十年史 沿革編」(昭和47年)
- 3) 三菱重工業(株)広島製作所「三菱重工業 広島製作所五十年史」(平成7年)
- 4) 広島県及び県内各市町村の郷土史・資料ほか

<図・写真提供>

- 図1 広島県「工業統計調査」
 - 図2 渡辺ともみ「たたら製鉄の近代史」(吉川弘文館、平成8年)、飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」(たたら研究会編「たたら研究14」より)
 - 図3 野原建一「たたら製鉄史の研究」(渓水社、平成20年)
- 写真1、4 ピクスタ